

松平不昧の茶会の料理（I）

— 食 品 材 料 —

Kaiseki Meal at Fumai's Tea Ceremonies (I)

— Food Stuffs —

長 沢 嘉 子・小松原 紀 子
(調理学研究室)

Yoshiko NAGASAWA・Noriko KOMATSUBARA

緒 言

松平不昧（出羽守治郷、1751～1818）は、松江藩7代の藩主である。17才で父宗衍に代って藩主となり、藩政の改革など多くの治績を挙げた。一方、18才で茶道を学び、「不昧流」を興したので、現在では、名君としてよりも、むしろ茶人不昧として、有名であるように思われる。

不昧は、その生涯に数多くの茶会を催したが、自身では、茶をたしなむものの心構えとして、その記録を残すことをしなかった。が、その茶席に列した人々は、それぞれに、そのようすを刻明に記録した。それが、根土宗静の「大円庵会記」、著者不明の「大崎御会記」と「大円庵様御懐石道具帖」および島根県立図書館所蔵の「大円庵様御一代茶会記」などである。

筆者らは、そのうちの「大円庵様御一代茶会記」について、その記録内容のうち、会席の料理献立の食品材料、調理法および菓子について調べ、あわせて、不昧の茶会記についても考察を加えた。本報では、そのうち、食品材料について、その種類、使用時期、使用頻度などを取りまとめた結果を報告する。

ま と め

この「茶会記」は、寛政6年から文化14年(1794～1817)の間に催された茶会についての記録と推定されたが、不昧の茶会を網羅したものではなく、

その一部の記録と思われた。また、ここに、記されていた茶会のほとんどは、江戸の大崎名園で催されたもので、御在所でのものはわずかであったが、この記録の茶席を、月別に分類してみると、次のようにあった。

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
回数	5	4	5	7	2	3	4	2	9	8	3	7

このうち、7月の1回は、菓子の記録のみで、料理についての記録がなく、10月、11月にも、それぞれ1回ずつ、料理（菓子を含む）について記されていなかったので、献立が記録されていたのは、計56回であった。

そこで、この献立について、まず、献立にみられる食品材料と、その使用頻度とを整理、集計した結果は、第1表～第14表のごとくであった。これらの結果からみて、不昧の茶会の献立の構成は、動物性食品には、魚介類、鳥肉類および卵がみられ、なかでも、その主体は魚介類で、植物性食品は、いも類、豆類、野菜類、きのこ類、海草類などであった。また、その内容は、鳥肉を除いて、現在の食生活にきわめて近いものであった。

つぎに、献立にみられた魚介類について、その内容をみると、生鮮魚類では、たい（26回）、さけ（11回）、あゆ（10回）、あじ（8回）、ます（7回）、かれい（6回）などの使用頻度が高かった。たいの使用回数が多いのは、江戸時代になると漁業が発達し、たいが大量に獲れはじめたた

第1表 魚介類

種類	月	(使用頻度)												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
生鮮魚	あいなめ								1			1		
	あじ	1		3	3	1						8		
	あじ腹子	1										1		
	かれい		1	2			1		1	1		6		
	きす			1		1	2	1				5		
	かつおのすし(し)		1									1		
	こち			1								1		
	さかな				1							1		
	こさかな										1	1		
	ざこ								1			1		
	さけ	1						4	6			11		
海水	さけ腹子							2				2		
	すずき	1			3	1						5		
	たい	6	5	2	4	1			5	1	2	26		
	たいの子		1									1		
	たら(子付き)	1										1		
	ほうぼう			1								1		
	ます		3	4								7		
	あら							1				1		
	うに							1				1		
	くらげ	1						1				2		
	たこの足			2								2		
生鮮魚(淡水)	なまこ	1										1		
	あゆ	1	1	2				3	3			10		
	こい		2									2		
	しらうお	1						2				3		
	(はぜ)							1				1		
塩物	ふな	1	1									2		
	かしら(焼)	1										1		
	塩きす							1				1		
	さしさば					1	1					2		
	塩ぶり	1	2		1	1						5		
	あじ塩から						1					1		
	さば塩から					1	1	1				3		
	あゆのこ塩から							1				1		
	かつおぶし	1	1	2		1	2	4	2			13		
	とかずの子	1										1		
	からすみ	2	3	2	3				1			11		
貝	のしあじ				1							1		
	のしきす		1	1								2		
	きんし				1							1		
	たづくり						1					1		
	するめ		1									1		
	干しらうお		1									1		
	あかがい							2				2		

貝類	月	(使用頻度)												計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
かき											2			2
たいらぎ								1						1
はまぐり		1	1	1							2			5
ほたてがい												1		1
みるくい						1								1
かまばこ											1	3		4
しんじょう											1			1
たいしんじょう			1											1
かきしんじょう												1	1	2
はんぺん								1						1
魚豆腐											1	1	2	
計		18	21	19	31	8	8	6	6	26	28	3	6	180

め、幕府が、祝宴にたいを用いるようになった(かっては、こいが最上のものとされた)ことによるとと思われた。また、塩もの、干ものでは、塩ぶり(5回)とからすみ(11回)が、貝類では、はまぐり(5回)、あわび(4回)が多く用いられ、かまばこやしんじょなど(11回)もみられた。季節的には、冬から春(10~12月、1~5月)にかけては、たいの使用頻度が高く、夏は、きす、あゆが多く、さしさば、塩からなどの塩ものの使用頻度も高かった。また、5~9月と11月、12月は、他の月に比べて、やや魚介類の使用頻度が低いが、これには、後述の、7~9月に豆腐やさといもの使用頻度が高いことや、11月に鳥肉の、12月に鳥

第2表 鳥肉類

種類	月	(使用頻度)												計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
かも											1	2	3	6
がん											1			1
つる			1											1
鶴														1
雀		1												1
ばん				1										1
ひわ												1	1	
塩かも					2									2
塩鳥						1								1
塩鶴			1											1
かもかまばこ		1									1			2
かもしんじょう		1												1
計		3	1	1	4						3	2	5	19

第3表 卵類

種類	月	(使用頻度)												計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
卵白身											1			1
金糸卵		1												1
青海				1										1
計		1	1								1			3

肉と豆類の使用頻度が、それぞれ高いことも無関係ではないと思われた。なお、「かつおのすし」は、筋がつおと呼ばれた、生のかつおのことではないかと思われた。

つぎに、鳥肉類と卵類では、かも（塩かも、かまぼこなどで13回）が最も多く用いられていた。また、その種類は、この献立では、がん、つる、ばん、ひわなど5種類であったが、享保15年（1730）に著された「料理綱目調味抄」に掲げられている鳥の種類は、20余種に及んでいて、これと比較すると、この献立における鳥肉類の種類はやや少なかった。季節的には、鳥肉が用いられたのは、1～4月と10～12月の寒い時期だけであった。なお、「鶴」はつると思われ、「霍」は、この「茶会記」の、香合の描写に、「青貝霍」、「青貝鶴」の記録がみられたので、つるかとも思われたが、「霍公鳥」「雲雀」、「霍=豆の葉、当時は豆の葉も野菜の一種であった」などもあり、特定の食品を推定できなかった。また、この献立には、獣肉は用いられていなかった。卵は、2月、3月、9月にそれぞれ1回ずつ用いられていたが、その使用頻度は低かった。すでに、あひる、つる、にわとりなどの卵があり、食用とされていたが、卵が本格的に用いられるようになったのは、明治に入ってからと思われる。「青海」は、青海卵、青海豆腐のいずれかと思われた。すなわち、卵または豆腐に、青のりの粉を加えて調理したものである。

つぎに、いも類では、6～9月を中心に、さといも（いも、ずいき根などで7回）が多く用いられていた。これは、収穫期であったことにもようが、その別名を「家芋」とも呼ばれ、出雲風土記などにもみられる古くからの貴重な食品である。

(使用頻度)														
種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
こんにゃく										1	1			
唐のいも									1	2	3			
唐のいもの子										1	1			
いも	1				1						2			
さといも						2	3				5			
ずいきの根						1					1			
むかご							1				1			
くず巻						1					1			
くずめん					1						1			
計	1			1	1	4	4	1	4	16				

ったことにもよると思われた。なお、10月と12月にみられた「唐のいも」は、さつまいもと思われた。

つぎに、豆類では、9～12月に豆腐とその調理品（16回）が多く用いられ、ついで、ゆば（9回、^{2) 姥}、上皮とも呼ばれた）、納豆（8回）などがあ

第5表 豆類 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
豆腐										1	1		2	4
青豆腐										1				1
青空豆腐										1				1
今出川豆腐										1				1
揚じょうよう豆腐	1													1
煮抜き豆腐								1	1					2
八杯豆腐							1							1
焼き豆腐										1	2	3		
寄せ豆腐										1				1
氷豆腐											1			1
ゆば	1		2							3	2	8		
生うば				1										1
納豆		1								1	2	4		
淨福寺納豆					1					1				2
粒納豆										2				2
から										1				1
計	2	1	4		1	1	1	5	10		9	34		

った。淨（常）福寺納豆は、大豆、小麦、塩、山椒を原料としたものである。なお、「から」は、おからであると思われた。

つぎに、緑黄色野菜では、しそ（19回）、菜類（だいこん葉、若な、ちさなどで13回）、とうがらし（10回）であった。とくに、6～9月には、しそ、とうがらしのみが用いられ、葉菜類はみられなかった。元禄10年（1697）に公刊された「農業

第6表 緑黄色野菜 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
かぶ葉											1			1
しそ			2	5		2	1		2					12
しそ穂									1	6				7
だいこん葉					1					1	2	4		
ちさ		2												2
とうがらし	1	2							1	1	2			7
青とうがらし						2			1					3
な	1										1	1	3	
若な	3													3
房菜	1													1
房											1			1
計	4	2	6	6		4	1	2	10	5	1	3	44	

「全書」によると、すでに、しゅんぎく、ふだんそう、ほうれんそうなども栽培され、ほかに、かぼちゃやにんじんの栽培法などもみられることから、この献立における緑黄色野菜は、ややその種類に乏しいと思われた。なお、「若な」は、春の七草で、お正月に関するものは、若水、若菜などと呼ばれたので、1月に用いた菜類を、若なと記されたのであろう。しかし、「房」および「房菜」に

第7表 その他の野菜 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
	う	ど	2	1	1							2	6	
うどの穂			1										1	
かぶ		1		1							2		4	
大かぶ		1											1	
天王寺かぶ											1	1	2	
きうり							1						1	
唐うり						1		1	2				4	
黄菊									1				1	
くわい		1											1	
吹田くわい		1											1	
ごぼう										2	1	1	4	
ささげ									1				1	
さやまめ		1	1	1									3	
いんげん				1	1								2	
まめ				1					1				2	
じゅんさい			2	6	1								9	
しょうが		1	1	2					1	2	2	9		
しろうり					2								2	
ずいき						1		1					2	
だいこん		1	1				1		1	3	4	11		
なつだいこん			1										1	
はだなだいこん		1											1	
細根なごん(?)		1		1									2	
宮重だいこん									1				1	
たけのこ			3	4									7	
なす				2	2	3	3		2				12	
ねぎ(白根)											1		1	
ふき		1											1	
ふきのとう		1	1							3			5	
みょうがたけ				1			1		1				3	
やえなりもやし								1					1	
ゆうがお					1								1	
ゆりね(ゆり)							1			1			2	
れんこん(はす)								1		1			2	
わさび		3	1	1	4	1	2			1	1	1	15	
干だいこん		2											2	
計		14	7	13	21	5	9	9	2	12	17	4	9	122

ついては、「房山椒」^{トウサンペイ}「蜀椒」=アサクラザンショウ、「房藻」=水草などがあり、また、文政2年(1819)8月の知恩院御門跡餐應料理の、雑煮の材料の一つに「ふさな」の名がみられたことから、野菜かとも考えたが、特定の食品を推定することはできなかった。

さらに、その他の野菜では、だいこん（16回）、わさび（15回）、なす（12回）、じゅんさい（9回）、しょうが（9回）、うど（7回）、たけのこ（7回）などが、それぞれの季節に多く用いられていた。また、かぶ、くわい、だいこんでは、「天王寺」、「吹田」、「波田野⁹⁾＝神奈川県秦野」など、その産地の名を冠したものもみられた。なお、「唐うり」は、かぼちゃよりも、むしろきうりと思われた。それは、延喜18年（918）の「本草和名」に「加良宇利」とあり、これが、きうり

第8表 つけもの類 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
しそ千枚づけ		1												1
菜付こうのもの													1	1
あさづけ												1	2	3
かくや												1	1	
かぶ	1													1
赤かぶづけ	1													1
もりぐちかぶら			1											1
きうり				2	2									4
しろうり						2			1					3
しろうり糠づけ									1					1
花丸		1									1			2
ならづけ花丸			1											1
だいこんづけ										2				2
だいこんかすづけ										1				1
たくあん	1	1	1	1						1		2	7	
なす					2	1	2	5						10
ならづけなす		1												1
ならづけ		1		1										2
ならづけうり	2		1	3							4	1		11
もりぐち			2			1				1				4
計	5	4	6	8	2	3	3	3	9	7	2	6		58

第9表　野　草　　(使用頻度)

¹⁰⁾とされていたことにもよるが、この献立のきうりの使用回数が、7月の1回（つけものでは、4月、5月に2回ずつみられた）で、他の料理書のきうりの使用頻度や、この献立のなすの使用頻度に比べても、かなり低いことにもよった。

さらに、つけもの類では、ならづけ類、なすのつけもの、たくあんなどが多く用いられ、この献立では、必ず1～2種のつけものが用いられていた。なお、「花丸」は、しろうりの江戸の称呼⁹⁾、花つきのごくわかいきうりなどがあった。

野菜全体としては、緑黄色野菜の種類が少なく、また、夏を中心として、葉菜類が乏しく、これは、現在の野菜消費の傾向に類似していた。一方、わさび、しょうが、しそなどの香りのある野菜の使用頻度が、かなり高かったが、これは、この献立が、茶席の料理、すなわち、客膳料理であったことによるものか、これが、当時の常食であったのかは、推量できなかった。さらに、1～3月には、つくし、よめな、わらびなどの摘み草があって、野菜の種類を豊かにしていた。

その他の食品としては、まず、きのこ類では、

第10表 きのこ類 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
いわたけ	1			1										2
えのきたけ											1	1		
きくらげ	1								1			2		
しいたけ	1											1		
生しいたけ	1	2										3		
しめじ									2			2		
しょうろ	1	1										2		
はつたけ							1	1				2		
まつたけ			1				1	8	1			11		
計		5	2	1	2			2	9	4	1	26		

第11表 海草類 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
えんす	1													1
海そうめん						1								1
こんぶ	1	2								2	1	6		
のり									1	1	2			
生のり										1	2	3		
干のり	1								1			2		
十六島		2										2		
すいせんじのり					1							1		
ほんだわら	1	1										2		
わかめ	1	1										2		
計		5	3	3	1	1			4	1	4	22		

第12表 種実類 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
かや	1	1												2
くり	1									3				4
かちぐり			2											2
けし	1		1	2	2				1	2	2			11
ごま							2							2
計		3	3	1	2	2		2	1	5	2			21

第13表 穀類 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
あわもち												1	1	
もち											1	1		
ふ										1				1
大徳寺ふ	1													1
相良ふ										2	1	3		
薯蕷ふ					1									1
米つみいれ			1											1
飯								1	1			1	3	
こうじ												1	1	
そば湯												1	1	
計		1	1	1			1		1	3		6	14	

第14表 その他の食品 (使用頻度)

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
梅											1			1
梅干			1				1						1	3
梅の花		1												1
ゆず	1			5	2	2	2	2	1	2	19			
編笠ゆず										1				1
ゆずみそ									3	2	5			
ぐみ					1									1
桜の実			1	3	1									5
桜の実塩づけ				1										1
桜花塩づけ				2										2
桜花酢づけ			1											1
ざくろ										1				1
からし	1	1	1	3			2		2					10
こしとう														1
木の芽		1	1											2
さんしょう	2					1					2			5
たで			2		1			1						4
たで穂						1	1	1						3
計		4	4	6	14	5	3	5	3	6	9	1	6	66

まつたけ（11回）が多く用いられ、海草類では、のり（10回）、こんぶ（6回）の使用頻度が高かった。また、十六島のり（雲州産）や、中国料理で名高いえんす（燕巣）もみられた。えんすは、当時の他の料理の記録にもその名がみられた。種実類では、けし（11回）が多く用いられ、ごまは

2回であった。このことは、現代の食生活とは大変趣きを異にしていた。その他では、ゆず（25回）、桜や梅の花、ふ、餅などもみられた。

なお、この「茶会記」の一献立あたりの、各食品群別の平均の使用食品数を多い順に並べると、魚介類3.2種、その他の野菜2.2種、その他の食品1.2種、つけもの類1.0種、緑黄色野菜0.8種、豆類0.6種、きのこ類0.5種、海草類0.4種、種実類0.4種、鳥肉類0.3種、いも類0.3種、穀類0.3種、野草0.2種、卵類0.1種であった。また、一献立あたりの、使用食品の総数は、11.5種であった。

以上からみて、この献立を構成している食品材料は、鳥肉類を除いて、現代の食生活に近く、季節が鮮明であった。また、当時の他の料理の記録に比較して、質素なものであると思われた。

要 約

不昧の茶会記について、その会席献立にみられる食品材料を調べた。動物性食品は、魚介類、鳥肉・卵類で、その主体は魚介類であった。また、植物性食品は、いも類、豆類、野菜類などで、野菜類では、葉菜類の種類が少なく、しそ、とうがらし、だいこん、なすなどが多く用いられていた。これらは、獣肉のみられない点を除いて、現代の食生活にきわめて近いものであったし、野菜の消費の季節的傾向などは、全く現代に類似していた。

文 献

- 1) 高橋梅園： 茶禅不昧公、東京、宝雲社
(昭19) 236頁
- 2) 石村春莊写： 大円庵様御一代茶会記、島根県立図書館所蔵
- 3) 渡辺実： 日本食生活史、東京、吉川弘文館
(昭39) 194頁
- 4) 吉井始子： 江戸時代料理本集成 - 料理網目調味抄1～5巻 - 京都、臨川書店(1977)
- 5) 加藤義成： 出雲国風土記、松江、千鳥書房
(昭52) 17、30頁
- 6) 清水桂一： 日本料理法大全、東京、第一出版
(昭40) 115、21頁
- 7) 宮崎安貞： 農業全書、東京、岩波書店
(1977) 87頁
- 8) 雄山閣編： 資料食物史 - 近世餐饌抄 - 、東京、雄山閣
(昭35) 23頁
- 9) 東条操： 物類称呼、東京、岩波書店
(1977) 78、84頁
- 10) 平野正章： やさい風土記、東京、毎日新聞社
(昭51) 149、108頁

(昭和53年1月17日受理)